

岩村地区県営圃場に伴う
岩村遺跡群発掘調査概要

1996. 3

南国市教育委員会



I区完掘状況全景

序

高知県下には、現在、約2,500個所を数える遺跡が所在することが知られており、このうち南国市には、200個所以上の遺跡が所在し、県内市町村の中で最も多くの遺跡が残されております。

南国市は県中央部に位置し、市域は高知平野の大半を占めるなど、恵まれた自然環境をもち、古来土佐の文化の中心地がありました。このため、高知県の歴史を理解するうえで重要な遺跡が集中しており、代表的な遺跡については、これまで国・県・市指定史跡として保存措置が講じられてまいりました。しかし、近年南国市においても急速な勢いで進展する各種開発事業に伴い、遺跡の記録保存のための発掘調査等の件数も増加の一途をたどっており、過去にも多くの遺跡が調査されています。

南国市教育委員会では、岩村地区県営担い手育成（圃場整備）事業に伴い、岩村遺跡群の発掘調査を、今回は第一次調査として実施いたしましたところ、弥生時代中期から中世、近世に至る遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。本年度の成果により、今後の調査に一層の期待が寄せられます。

最後に、調査にあたって御指導をいただきました出原恵三氏、並びに調査に深い御理解、御協力をいただいた地権者の皆様方、関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成8年3月

南国市教育長 西森善郎

例　　言

- 1 本書は、平成7年度岩村地区県営圃場整備事業に伴う、岩村遺跡群の発掘調査の報告書第1集である。
- 2 岩村遺跡群は高知県南国市福船にある。
- 3 今年度の全調査面積は2,345m²であり、1区、2区と分けて調査をおこなった。当報告書は1区のものである。1区、2区を通じての調査期間は平成7年9月29日～平成8年2月7日である。
- 4 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、南国市教育委員会が主体となって実施した。各役割分担は以下のとおりである。

調査員	横井理恵	南国市教育委員会	埋蔵文化財担当	嘱託職員
	武市義浩	"	"	臨時職員

庶務担当	坂本芳史	南国市教育委員会	社会教育課主事
------	------	----------	---------

- 5 本書の執筆、編集は坂本芳史、武市義浩がそれぞれ分担し、おこなった。
- 6 現場作業においては、高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏の協力を得た。
整理作業においては特に同センターの山中美代子・大原喜子氏の協力を得た。
記して深く謝意を表したい。
- 7 現地の測量にあたっては、新日本測量の協力を得ておこなった。なお、発掘調査にあたっては、ご理解、ご協力をいただいた地元改良組合をはじめ、地元住民の方々、及び、現地作業員、整理作業員の皆様のご援助に対し、記して深く謝意を表したい。
- 8 当遺跡出土資料は、南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は95-NIである。

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 周辺の地理的、歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
1. 基本層準	5
2. 検出遺構と遺物	5
第4章 考案	18

押図目次

Fig. 1 岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡	3
Fig. 2 岩村遺跡群調査区位置図	4
Fig. 3 岩村遺跡群 1 区検出遺構全体図	8
Fig. 4 調査区北壁セクション・堀平面・堀セクション図	9
Fig. 5 堀 A 出土遺物実測図	10
Fig. 6 堀 A 出土遺物実測図	11
Fig. 7 堀 B 出土遺物実測図	12
Fig. 8 SK 2・7・8・11平面、エレベーション、セクション図	13
Fig. 9 SK 14~16・18・20平面、エレベーション図	14
Fig. 10 SK 7・25出土遺物実測図	15
Fig. 11 出土遺物実測図	16
Fig. 12 出土遺物実測図 SD 2-1・2・3 B 堀 SD 2-1(61) SD 2-2(60) SD 2-3(58) 堀 B(59)	17
Fig. 13 SK 21・23平面エレベーション図	17

写真図版目次

- P.L. 1 調査前風景（南から）・同（北西から）
- P.L. 2 SK7・同壁溝セクション
- P.L. 3 堀 完掘状況・同中央バンク南壁
- P.L. 4 堀 全景（北から）・SK14 完掘状況
- P.L. 5 SK25 西壁セクション・SK21 完掘状況
- P.L. 6 SD2-1 遺物出土状況・SK7 遺物出土状況
- P.L. 7 SD14 遺物出土状況・同拡大
- P.L. 8 発掘風景・同
- P.L. 9 堀・SK7・SD2出土遺物・同裏面
- P.L. 10 堀・SK7、25・SD2出土遺物
- P.L. 11 堀・SK7出土遺物
- P.L. 12 堀・SK7出土遺物

第1章 調査に至る経過

南国市岩村地区においては、平成6年度より高知県三大河川の一つである物部川右岸の農地50.6ヘクタールを対象とした岩村地区県営圃場整備事業が開始され、狭隘で不整形な農地の区画整理や統合・農道・用排水路等の系統的な整備を進め近代的な農地への転換を計っている。近年特に多用化しつつある農業に対応し、合理的な経営と集約農業による農家所得の増収を保障しようとするものである。

一方、当事業対象地区内には、先史時代以来今日まで、南国市を築き上げてきた祖先の営みの跡とも言うべき岩村遺跡群が存在している。

岩村地区遺跡群は、岩村遺跡と岩村土居城跡の総称である。個々の遺跡は私たちの祖先が厳しい自然と戦いながら大地に刻み込んだ偽らざる、そしてまた二度と繰り返すことのない歴史である。埋蔵文化財は、過去の事実を蘊しているのみならず歴史の歩んできた方向性を示し、現代社会を生きる私たちにとっては、「未来への羅針盤としての役割を担っているところの真に国民の共有財産として位置付けられている。」南国市教育委員会は、遺跡のもつかかる重要性に鑑み、開発部局に対してその保護と調和のとれた開発行為の実施について数次にわたる協議を重ね、特に遺跡部分の削平面積については極力少なくするよう工法等についての検討を頑って来たところである。そして道路・水路・深度によって異なるが削平部分については、南国市教育委員会による試掘調査の結果によって必要と認める部分については記録保存のための本格調査を行うこととなった。まず平成6年度に、平成9年度事業対象地区にある遺跡範囲について試掘調査（試掘面積205m²）を実施した。

この調査の成果から、南国市岩村字城の東周辺より弥生時代後期の堅穴住居跡・溝跡・柱跡等が、また奈良～平安時代の溝跡・柱跡、室町～戦国時代の井戸跡・柱跡・土杭等が検出され、土器等の遺物が出土。加えて、岩村土居城跡からは鎌倉末～室町時代・戦国時代の溝跡・柱跡・土杭等が検出され、これまで不明であった城跡の様相が次第に明らかになってきた。これらのことと含まえて、岩村遺跡群は弥生時代後期から戦国時代にかけての広範囲な複合遺跡であることが判明し、その範囲は当該圃場整備事業の計画区域内のなかだけでも約50,000m²におよぶとみられる。

その結果、平成7年度は、第一次本調査（本調査面積2,345m²）をI区・II区と別けて実施した。

第2章 周辺の地理的、歴史的環境

1 地理的環境

岩村遺跡群は、南国市の東端、県下三大河川の一つであり、劍山系の白髪山に源を発し、流路延長70.5kmの物部川河口から約3km程上流にのぼった西岸に位置し、現地表は、海拔19.8m前後を測る。岩村遺跡群の所在する南国市は、東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のはば中央部にあり、県下最大の平野である、高知平野の東部に位置する。高知平野の中でも、南国市、土佐山田町、野市町及びその周辺の平野部は、香美郡と長岡郡に属していたことから、香長平野とも呼ばれており、本県最大の穀倉地帯を誇っている。

香長平野は、物部川によって、その大部分を形成されており、物部川に沿って沖積扇状地が、その両側に開析扇状地が発達する。開析扇状地は、土佐山田町、野市町方面に発達し、沖積扇状地は、土佐山田町岩積付近以南の現河道西側に広く分布している。

物部川と香長平野が今日のような、景観を呈するようになったのは、中・近世以降のことである。それ以前は、岩積付近が、自然の吐流口となって、幾筋もの流派をなしていたが、中世になると、それまで多数存在していた小流域の幾つかが、堆積作用によって埋まり、大きな自然堤防が形成され、物部川の流域の定着化が始まったと考えられる。さらに近世になると、堤防強化や流域の変更工事がなされ、周辺に点在する自然堤防の削平や窪地の埋め立て等が行われ、現河道西側の低湿地帯は、次第に水田化され、反対に東側は削平され、今日とほとんど変わりない景観を呈するようになった。

2 歴史的環境

南国市は、物部川、国分川により、形成された沖積平野である高知平野の大半を占めているところから遺跡の密度も高く、各時代の遺跡の所在が知られており、近世以前は土佐の中心地として栄えた地域である。

縄文時代の遺跡は少なく、数ヶ所確認されているにすぎない。岡豊町定林寺に栄エ田遺跡、南の平野部では田村遺跡群のLoc.47などが所在する。

弥生時代の遺跡は数多く知られ、中でも田村遺跡群では前期初頭の集落跡と水田址が検出され、中～後期にかけての集落跡も確認されており、高知平野における拠点的集落であったと考えられる。

古墳時代の遺跡としては、6～7世紀の横穴式石室をもつ古墳が北部の山麓部及び独立丘陵上に多数存在している。南国市北部の岡豊、国分、長岡方面では集落址が分布し、土佐國府跡の発掘調査で6～7世紀の縦穴住居址が30棟前後検出されている。

古代から中世においては、土佐國府跡、土佐國分寺跡、比江廃寺跡などの遺跡が位置している。岩村遺跡群内には、岩村土居城跡があったとされ、現状は水田の中に城の北西隅及び東北隅部分と考えられる土壘状地形が「L」字形地形として残存し、その外側に振跡を踏襲したと考えられる狭長地形の水田が存在する。



Fig.1 岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡

番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	岩村遺跡群	弥生～中世	11	横落遺跡	弥生～平安	21	北角田遺跡	弥生～平安
2	若宮遺跡	弥生～平安	12	桧物ヶ内遺跡	古墳～平安	22	立田土居城跡	中世
3	埋添遺跡	古墳～中世	13	カントフリ遺跡	義文～古墳～平安	23	修理田遺跡	弥生～平安
4	包地土居城跡	中世	14	委中内遺跡	弥生～平安	24	田村遺跡群	縄文～近世
5	芝田遺跡	古墳～中世	15	上横田遺跡	古墳～平安	25	田村城跡	中世
6	ムロカ内遺跡	弥生～中世	16	大北遺跡	古墳～中世	26	千屋城跡	中世
7	屋根添遺跡	古 墳	17	平杭遺跡	弥生～古墳	27	季重遺跡	古墳～近世
8	芝ノ端遺跡	古 墓	18	高添遺跡	弥生～平安	28	公家ノ前遺跡	古墳～近世
9	石神遺跡	弥生～平安	19	寺ノ前遺跡	弥生～中世	29	司例田遺跡	古墳～近世
10	古流曾遺跡	古墳～平安	20	徳弘土居城跡	中世	30	中屋敷遺跡	弥 生

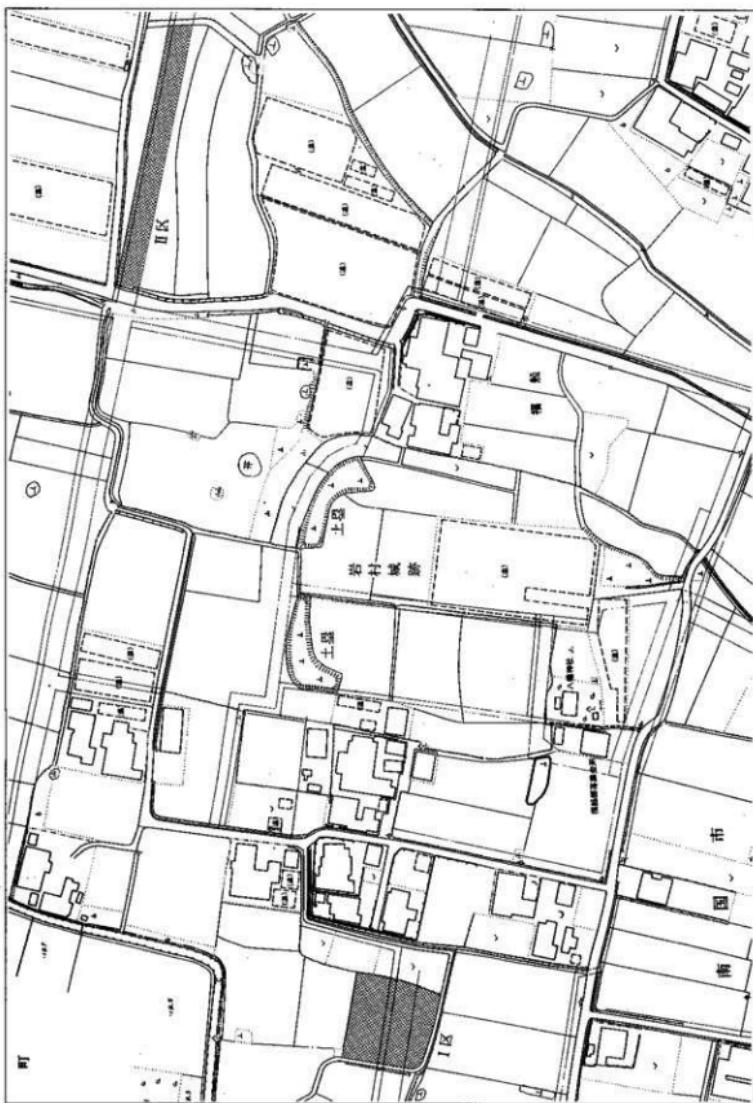


Fig.2 岩村遺跡群調査区位置図

第3章 調査の成果

1. 基本層準 (Fig. 4)

現表土（耕作度）と床土を除くと茶灰色粘質土の中、近世の遺物包含層が20~30cmの厚さで堆積しており、その下は砂層あるいはシルト層となっている。これらの砂層～シルト層は物部川による新規冲積層である。この砂層～シルト層（V層）上面が中・近世の遺構検出面となっている。

I層：耕作土

II層：床土

III層：茶灰黄色粘質土（中・近世遺物包含層）

IV層：灰茶色砂層

2. 検出遺構と遺物

掘 (Fig. 4~7)

調査区の西端の現畦畔にそって南北方面に伸びる遺構である。延長25mまで確認できた。幅は1.8~2.0m、深さ60~80cmを測る。断面はU字形を呈しており西肩はそのまま現在の畦畔となっている。検出の段階では1条の溝状遺構として捉えたが、断面観察から2条の溝が重複していることが明らかとなった。先に掘られた溝を掘A、新しい方を掘Bとする。掘Aは埋土Ⅲ・Ⅳ層あるいはⅢ・Ⅳ・V層からなっており、埋土中・床面から土師器小皿（1, 2）同杯（3~5）、東播系須恵器碗（6）、青磁碗（8~12）、白磁碗（7）、天目茶碗（13）、土師器こね鉢（14）、備前攢鉢（15）、瓦器縞（16~20, 22）、東播磨系土師器鍋（21）、土師器鍋（23）、が出土している。これらの遺物は10世紀代から15世紀代に及ぶが、掘Aが掘削され機能した期間は、ほぼ15世紀代と考えられる。一旦掘Aの西側埋土を切って掘Bが掘削されている。掘Bの西壁上部には部分的に石垣の基部のような石列が確かめられる。また掘Bの埋土中には、人頭大の河原石が多く見られるが、この石垣状遺構からの崩落によるものと考えられる。埋土I・II層よりは、18~19世紀代の上絵付椀（24）、肥前系の銅線袖を施した内面蛇ノ目状割りの皿（29, 31）、染付け椀（30）、備前攢鉢（33）、唐津鉢（32）、などが出土している。したがって掘Bは近世（18~19世紀）に機能した掘とすることができよう。この2時期にわたる掘は、田村遺跡や十万遺跡で確認されている中世末、近世における屋敷地を囲む掘としての性格が考えられる。

S D 2 (Fig.12)

調査区の東端、北方を逆L字状に走る。すべて関連性があると思われるが、調査、遺物の取上げを別々に行ったため、便宜上3ヶ所に分けた。総延長29.6mで、S D 2-1、長さ11.76m、幅50~90cm、深さ6~9cmを測る。S D 2-2、長さ6m、幅30~45cm、深さ5~13cmを測る。S D 2-3、長さ11.84m、幅45~90cm、深さ8~11cmを測る。断面形は舟底ないし逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。

S D 2-1 調査区の東端を南北に走り、北方は西よりに少し曲折している。南方はSK 7に掘

り込まれており、SK 10に切られている。出土品については19世紀近世陶磁器椀（61）土師器細片が出土している。

SD 2-2 調査区の北方を東西に走っている。SD 18の東側に位置している。出土品については19世紀近世陶器皿（60）、が出土している。

SD 2-3 SD 2-2と同じく、調査区の北方を東西に走っており、東端をSD 18に切られている。西方はL字形に南方へ屈折している。出土品はSD 2-1、SD 2-2から出土した陶器より古い15世紀頃の陶器が出土したが、混入品であると思われる。又、調査区南西隅にあるSD 12とつながると思われるが、完掘できず、関連性は分からぬ。

性格については、調査区の東方約300mの場所に岩村土居城跡があり、その家臣団の屋敷地を囲繞する溝の可能性があると考えられる。

土坑

SK 2 (Fig. 8)

調査区の北東に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.62m、短径0.84m、深さ0.40mを測る。床面は中央部が少しくぼんでおり、西壁が斜めに立ち上がっている。埋土は灰黄色粘質土である。出土遺物は、埋土中に土師器、須恵器、瓦質土器などの細片が数点出土している。

SK 7 (Fig. 8・10)

調査区の東南端に位置する。長方形の平面形を有し、長径2.84m、短径0.72m、深さ0.80mを測る。SD 2と一体のものであるが、深く掘りこまれているため、独立のものとして捉えた。埋土はおおむねI～V層の粘質土及び粘土からなる。V層に木葉などを含み、水たまりの沈殿のような状況であった。遺物はI～IV層から備前焼壺鉢（39、40、55、56）、陶器甕（57）、染付腰折れ陶器（53）、V層からは灯明皿と考えられる、土師器土器小皿（45、46）染付椀（49、50）京焼風上絵付椀（51）尾戸焼椀（54）平瓦等が出土している。

SK 8 (Fig. 8)

調査区の南方に位置する。橢円形の平面形を有し、長径1.74m、短径1.40m、深さ0.54mを測る。床面は平坦である。埋土は灰黄色粘質土である。遺物は石臼1点、京焼風椀1点、土師器細片、瓦片などが数点出土している。

SK 11 (Fig. 8)

調査区の中央部に位置する。不定形の平面形を有し、長径0.94m、短径0.92m、深さ0.24mを測る。床面は平坦で、浅い土坑である。埋土は茶灰色粘質土で、遺物は土師器杯片が数点出土している。

SK14 (Fig. 9)

調査区の南方に位置する。SK8の西に接する。楕円形の平面形を有し、長径2.68m、短径1.80m、深さ0.48mを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は京焼風碗、土師器細片数点、瓦質土器片が出土した。あと内部に40~50cm大の河原石が数個検出された。

SK15 (Fig. 9)

調査区の南方に位置する。SK14の西に接する。楕円形の平面形を有し、長径2.34m、短径2.12m、深さ0.48mを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は伊万里焼碗、京焼風碗、瓦片が数点出土している。SK14と同じく40~50cm大の河原石が数個検出された。しかし関連性については不明である。

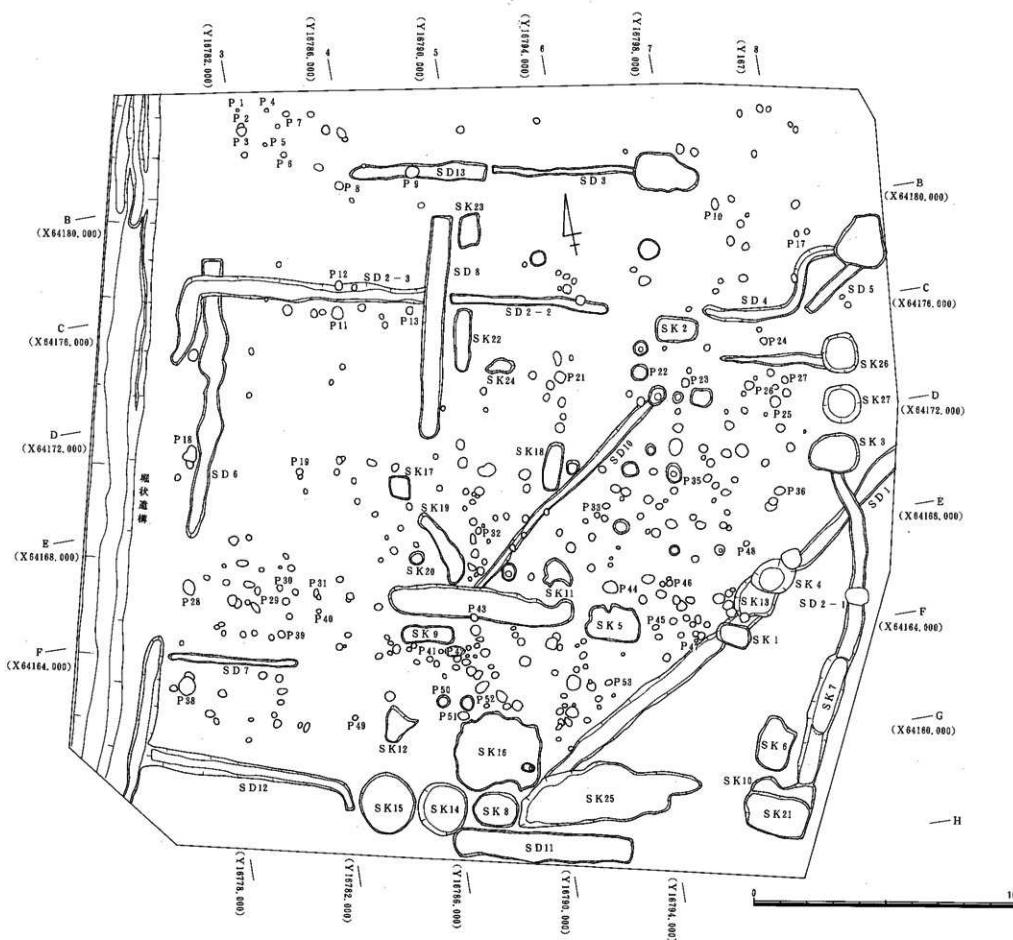
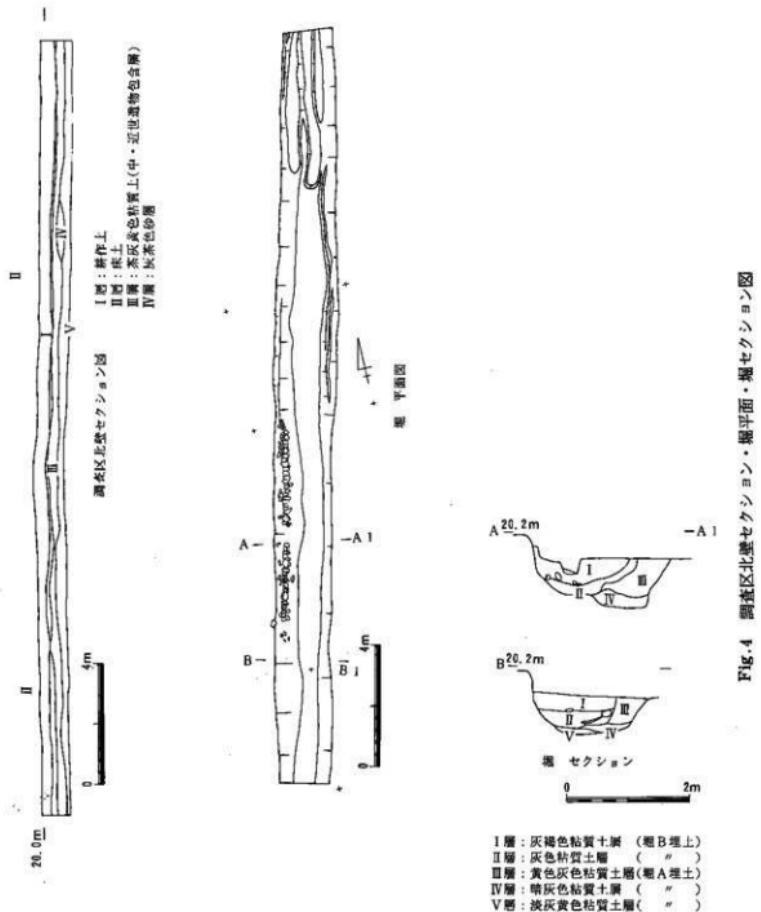


Fig.3 岩村遺跡後群1区検出遺構全体図



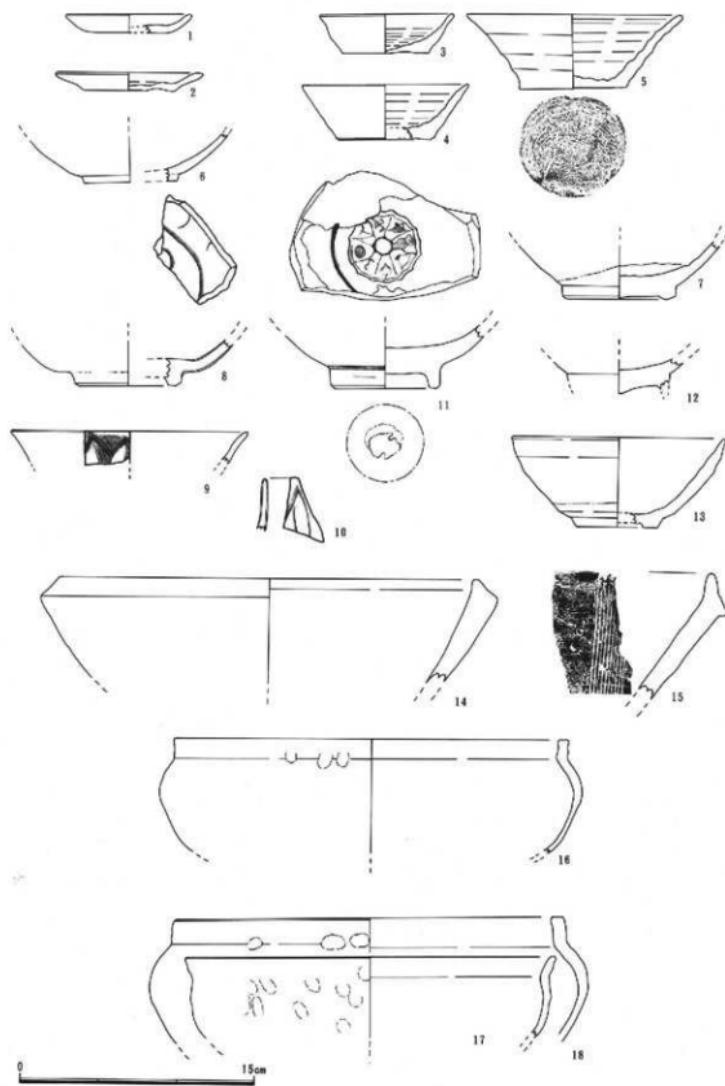


Fig.5 堀A出土遺物実測図

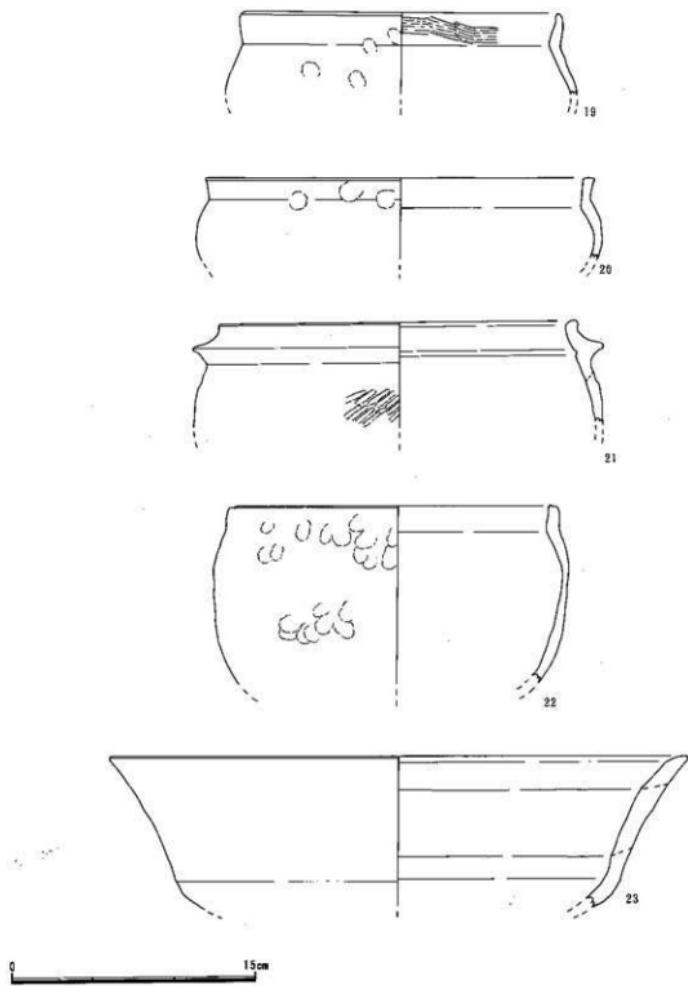


Fig.6 堀A出土遺物実測図

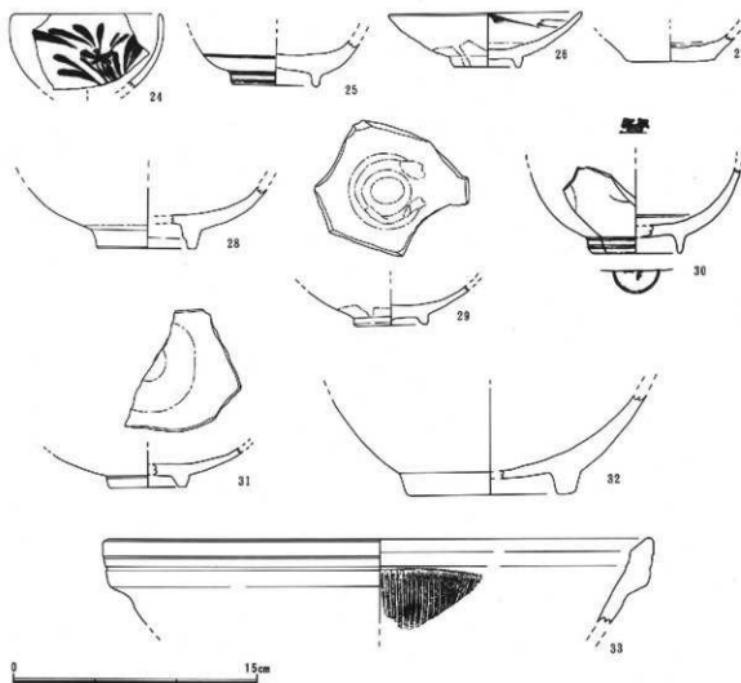


Fig.7 堀B出土遺物実測図

S K16 (Fig. 9)

調査区の南方に位置する。SK 8の北に位置する。不定形の平面形を有し、長径3.26m、短径2.76m、深さ0.30mを測る。床面は中央部が少しくぼんでおり、比較的と浅い土坑である。埋土は灰黄色粘質土で、遺物は伊万里焼皿、唐津焼、鉢、砂岩の石臼が1点出土している。

S K18 (Fig. 9)

調査区の中央部に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.74m、短径0.68m、深さ0.16mを測る。床面は平坦で、浅い土坑である。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は土師器細片が2点出土している。

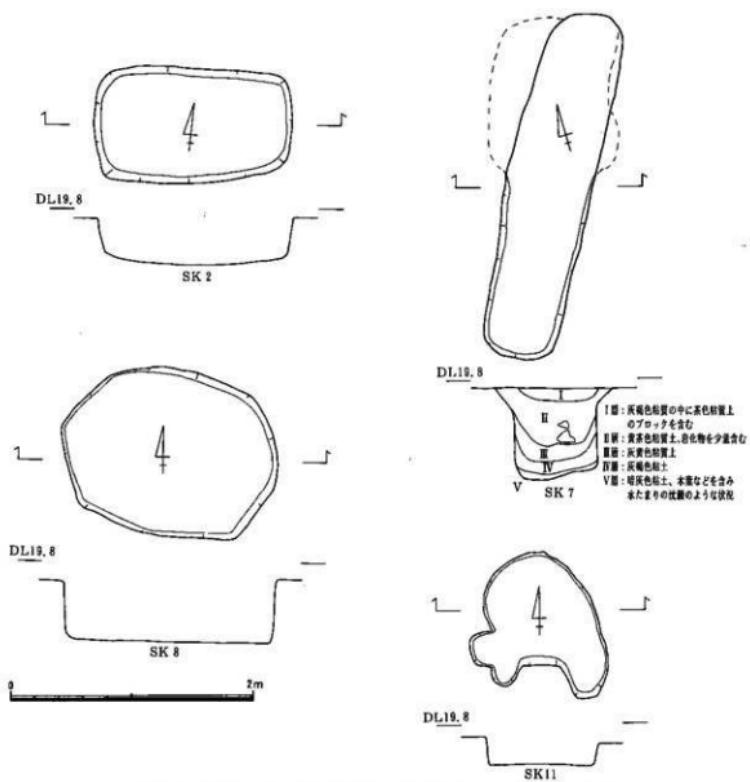


Fig.8 SK 2・7・8・11平面、エレベーション、セクション図
SK 20 (Fig. 9)

調査区の中央部に位置する。円形の平面形を有し、長径0.56m、短径0.54m、深さ0.18mを測る。床面は平坦である。遺物は土師器杯底部が出土している。小規模な遺構である。

SK 21 (Fig. 11・13)

調査区の東南端、SD 2の南端に位置している。SK 10と切りあっているが、先後関係は不明である。長径2.56m、短径1.48m、深さ0.44mを測る。北壁はSK 10と合わさるため、段上になっている。床面は中央部がくぼんでいる。床面に周辺を囲むように、10~20cm程の河原石が、三段程の高さに積み上げられていた。SD 2に関連する施設であると思われる。埋土は灰褐色粘質土で、出土品は、土師器小皿片多数、京焼風焼、伊万里皿(52)、土師器杯底部、土師器小皿(43, 44, 47, 48)、瓦片10数点出土した。

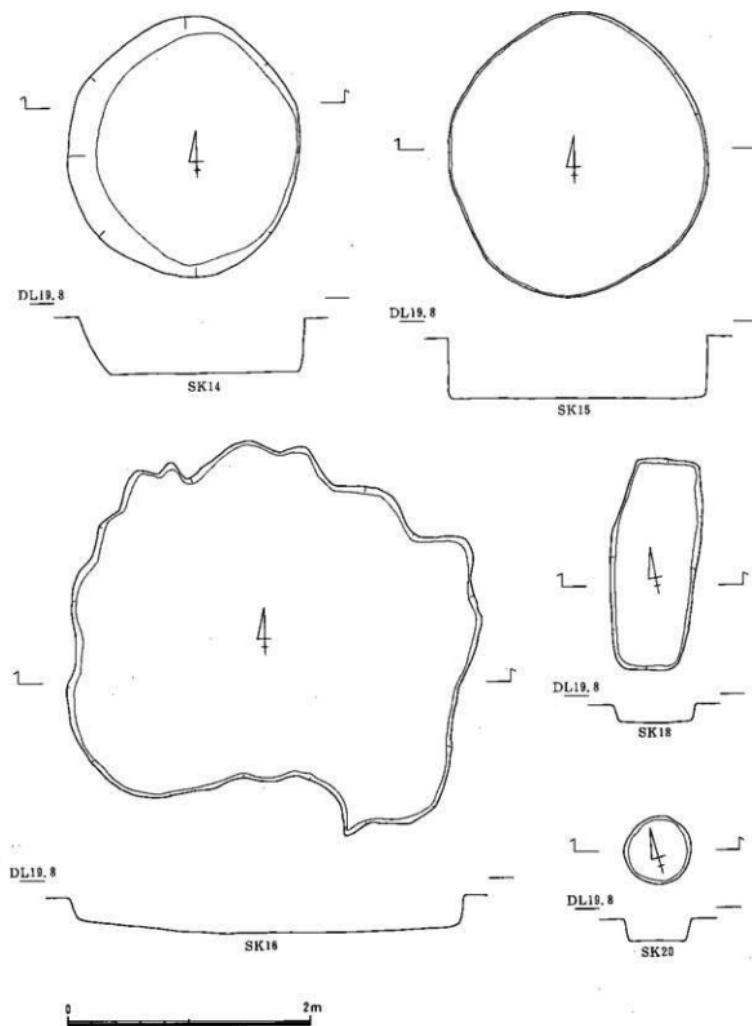


Fig.9 SK14~16・18・20平面、エレベーション図

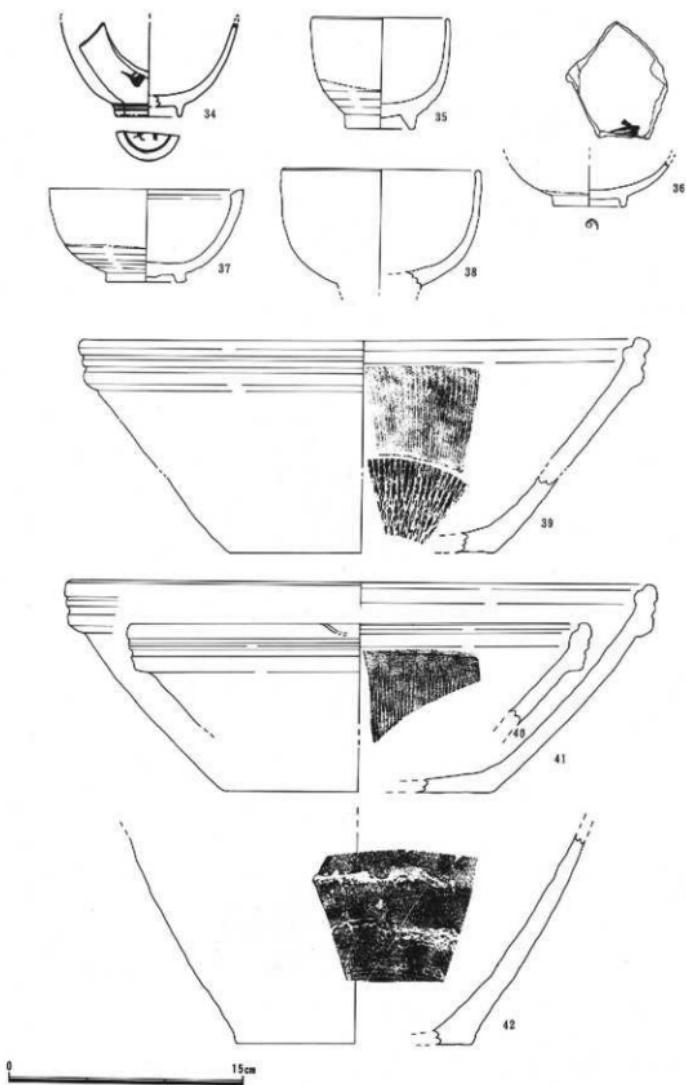


Fig.10 SK 7・25出土遺物実測図

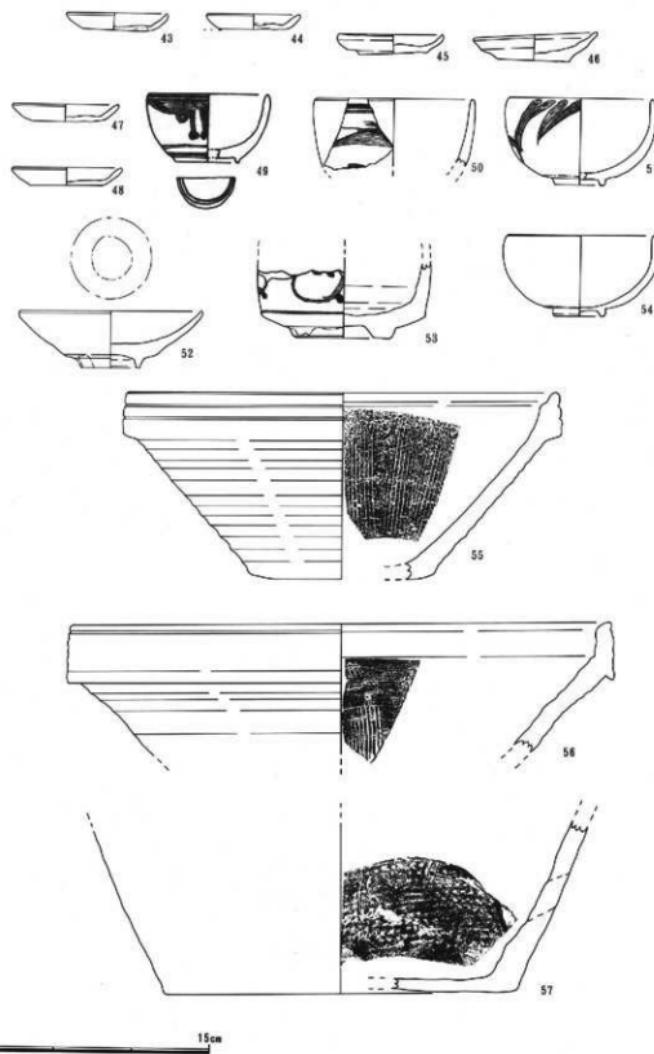


Fig.11 出土遺物実測図

SK23 (Fig.23)

調査区の北方に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.26m、短径0.90m、深さ最深部で0.28mを測る。床面は西壁へ向かうほど深くなっていく。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は、土師器細片、瓦質土器細片が数点出土した。

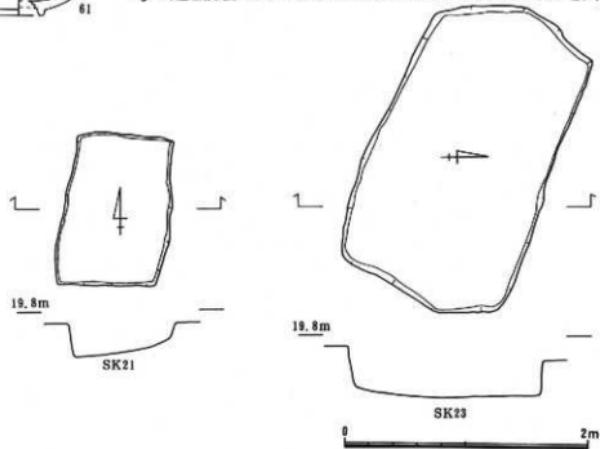
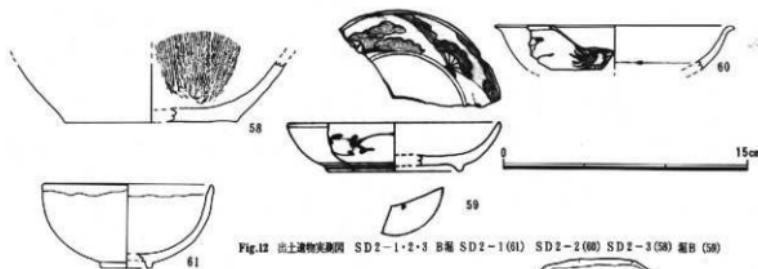


Fig.13 SK21・23平面エレベーション図

第4章 考 察

今回行なった調査区（1区）西方隅に、南北に伸びる2条に重複している堀が検出された。この堀から出土した遺物から判断すると、15世紀代、18～19世紀という2世代に機能していた遺構であるといえるだろう。この2時期にわたる堀は、中世末、近世における屋敷地を囲む堀としての性格が考えられる。

この調査区より北東約200mの場所に岩村土居城跡があり、堀が機能していた年代とほぼ、同時期であることから、何らかの関係があったものと思われる。そこで岩村土居城と現状についての説明を付け加えておこう。

県道前浜植野線福船郵便局東方400mの地点に八幡宮の社叢がある。標高21m内外の平地であり、現状は水田でそのなかに北西隅及び東北隅部分と考えられる土壘状地形と、その外側に堀跡を踏襲したと考えられる狭長地形の水田が存在する。八幡宮は西南隅部分である。

現状地形から土壘と考えられる地形は両方もともL字状地形として残存し、北西隅が敷6.6mで、南北13.5m、東西23mである。一方、東北隅部分は敷8mで東西21m、南北13mで消滅するが、これより南については土壘敷とほぼ同幅の狭長地割の水田がそのまま南端まで62m続いている。両隅を中心と北辺のはば中央部は18.5mにわたって北門の如く切られている。現状地形から土壘に囲まれた平地と推考される範囲は東西60m、南北100mの広さである。

土壘の外側はそれぞれ土壘に沿った狭長地割の水田が北から東にかけては8.5m～10m幅で南限までのび、西片についても10m幅同様の狭長割水田が存在し堀の存在を考えさせる。またこの土壘に沿う狭長地割の外側にいま一つ幅5.5～7mのやや高い狭長地割が存在するが、これも土壘や堀跡などと何らかの関連がある地形かも知れない。

北西700mには包地土居、西方1.4kmには包末土居、南西1.4kmには徳弘土居が、1.1kmには立田土居がある。周辺には「城ノ内」「西ノ内」「城ノ東」「城ノ南」「土居ノ後」などのホノギも所在する。

14世紀頃の岩村氏の居城とされている。建武3年26日南北朝の戦において、北朝方に攻撃され城郭は焼き払われたと言う。

「地検長」によると壘地積を入れて約8反の本城郭と、その西に3反36代の西内付属郭よりなる複郭式である。北中央寄りにある38代の城詰の東に「三ノ塙」その西に「二ノ塙」その東に「二ノ段」の諸郭があり周囲は堀濠に囲まれていたようである。

周辺の人々の話によれば、堀の東方に通称「茶がし湯」という所があり、ここは昔殿様が茶を飲んで休まれたところと伝えられている。

遺物観察表

(第1表)

拂図番号	造構番号	器種	法量 (cm)	口縁 底面 底部	特徴	備考
1	堀 (下層)	皿	7.8 1.25 — 5.2	淡褐色堅緻な胎土。0.1mm~0.5mmの砂粒を含む。 ほぼ平らな底部から、体部は斜め上方へのび、端部を丸く仕上げる。	土師小皿 内外面の一部 焼ける。	
2	"	"	9.6 1.2 — 5.0	淡褐色堅緻な胎土。細かな砂粒を含む。 体部は内側気味に上がり、端部は丸く仕上がる。	"	
3	"	环	8.6 2.6 — 5.6	淡褐色堅緻な胎土。細かな砂粒を含む。 体部は上外方へのび、端部を丸く仕上げる。 外面底部は回転糸切り。	土師環	
4	"		10.6 3.5 — 5.9	黄茶色堅緻な胎土。外面部ナデ。内面ロクロ目顯著。外面部は回転糸切り。		
5	"	碗	13.65 4.7 — 5.8	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に、ロクロ目顯著。外面部は回転糸切り。	土師器	
6	"	环	— (3.0) — 5.0	灰白色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。高台を呈する。外面部は回転糸切り。	須恵器	
7	堀 (上層)		— (4.7) — 7.2	灰褐色堅緻な胎土。外面部ナデ。釉調は白褐色。内面全面施釉剝り出し高台。内面に銀有り。	12C頃の白磁	
8	堀 (下層)	碗	— (2.8) — 6.3	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面施釉。多数ヒビ割れがある。削り出し高台。	青磁	
9	堀		15.0 (2.1) —	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面施釉。口縁部は、端部を丸く仕上げる。		
10	堀 (1層)		—	綠白色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面施釉。	青磁	
11	堀 (下層)		— (4.0) — 8.5	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面施釉。内面部に火捺有り。内面に多数のヒビ割れが見える。削り出し高台。	"	
12	堀 (1層)		— (2.2) —	綠白色堅緻な胎土。内外面共に全面施釉。削り出し高台。	"	
13	堀 (下層)	天目茶碗	13.4 5.7 — 5.2	暗茶褐褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面に鐵釉を施し、外面部に鉄釉を施している。削り出し高台。	天目茶碗	
14	"	こね鉢	26.4 (6.6) —	茶黄色やや粗い胎土。細かな砂粒を多く含む。口縁部で少しの内縮している。	土師器	
15	"	擂鉢	—	外面は灰褐色。内面は灰橙色。条線は10本単位である。口縁部は内と外とに盛り出している。内外面共に横ナデ。	備前	
16	"	鍋	25.0 (7.3) —	黒褐色な胎土で堅緻。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面共に横ナデ。	瓦器	
17	"	"	24.0 5.2 —	内面淡灰褐色。外面部褐色。堅緻な胎土。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ。	"	
18	堀 (1層)	"	24.6 (5.0) —	灰褐色な胎土で堅緻。内外面共に横ナデ。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面共にすくした跡がある。	"	

遺物観察表

(第2表)

掲図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 横高 縦長 底径	特徴	備考
19	(下層)	鉢	19.0 (5.0) — —	外面黒褐色、内面灰黄色の胎土で堅緻。内外面共に横ナデ。体部は内面気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	瓦器
20	*	*	23.6 (5.0) — —	灰褐色で堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内面気味に立ち上がり、口縁部は外反している。内外面の一部にすくい跡がある。	"
21	(上層)	*	21.6 (6.4) — —	灰褐色で堅緻な胎土。細かな砂粒を多く含む。内外面共に横ナデ。体部は内面気味に立ち上がり、ツバは断面三角で強く張り出している。外面のツバ以下は、全体的にすくい跡がある。	土器
22	(下層)	*	19.6 (10.9) — —	灰褐色で堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内面気味に立ち上がり、口縁部は直線に立ち上がっている。外面の一部にすくい跡がある。	瓦器
23	(埋土)	*	35.0 (9.2) — —	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内面して立ち上がり、口縁部はわずかに外反しており、端部は丸くおさめる。外面は全面的にすくい跡がある。	土器
24	(裏 (床面))	碗	8.8 (4.6) — —	灰白色堅緻な胎土。胎色の釉を施釉していて、外面のそのうえに上絵付をほどこしている。	
25	(上層)	碗	— (2.9) 5.2	緑灰色や粗い胎土。外面全面に白褐色の釉を施釉。内外面共に直入あり、削り出し高台。高台外部に2本、外底部に1本の、くすんだ藍色の墨跡がある。	
26	*	*	10.8 3.4 4.1	灰白色堅緻な胎土。内外面共に白褐色の釉を施釉。体部外露胎部はオレンジ色に発色。内面は釉を蛇ノ目状に削っている。内面上方は、薄い模様による文様が入っている。	白磁
27	(上層)	环	— (1.7) 5.4	淡褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。外面底部は糸切り。	土器
28	(上層)	皿	— (3.9) 6.2	青褐色堅緻な胎土。内外面共に給色の釉を施釉している。内外面共に蛇ノ目状に釉を削りとっている。削り出し高台。	
29	*	*	— (2.3) (4.4)	内面緑灰色、外面淡褐色の堅緻な胎土。内面に墨灰色の釉を施釉している。体部外露胎部に給色の釉を施釉している。内面は釉を蛇ノ目状に削っている。	
30	(上、下層)	*	— (5.2) 5.6	淡褐色堅緻な胎土。内外面全面に給色の釉を施釉。高台外部に2本、外底部に1本の濃い蓝色の墨跡がある。内面底部に薄い模様による墨跡と文様が入っている。	
31	(下層)	碗	*	緑色堅緻な胎土。内外面共に白褐色の釉を施釉している。内面は蛇ノ目状に釉を削りとっている。体部外露胎部は一部何かかってない。削り出し高台。	
32	(上層)	こね鉢	— (8.0) 10.0	外面黒褐色、内面淡茶色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。削り出し高台。	備前
33	(上層)	擂鉢	33.0 (5.3) — —	赤褐色堅緻な胎土。口縁部内面凹がある。口縁部外面に2本の浅い墨跡がある。	"
34	S K25	*	— (6.1) 4.0	灰白色堅緻な胎土。内外面全面に、白色の釉を施釉している。高台外部に2本、外底部に1本の薄い藍色の墨跡がある。外面に蓝色で釉を塗かれている。削り出し高台。	
35	*	天目茶碗	8.3 7.1 4.4	褐褐色や粗い胎土。内面全面、外底部に給色の釉を施釉。外露胎部はオレンジ色に発色。削り出し高台。	
36	*	*	— (2.8) 4.6	淡褐色堅緻な胎土。内面全面、外底部に白褐色の釉を施釉。外露胎部ははだ色に発色。削り出し高台。	陶器

遺物観察表

(第3表)

捕獲番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁部 側面 底深	特徴	備考
37	SK25		12.2 4.9 — 5.0	黄白色やや粗い胎土。透明度の強い、薄い緑色の釉を全面外面 側面に施釉。全面に貫入あり。胎土は砂粒を多く含む。外縁部胎 部には、ノミで削り跡が認められる。底面外縁周辺がみられる。		廻戸系
38	"		12.2 (7.7) —	黄土色堅緻な胎土。胎色の釉を全面に施釉している。内外 全面に貫入あり。		陶器
39	SK7	壺鉢	35.0 13.5 — 16.8	赤茶色やや粗い胎土。口縁部外面に2本の浅い凹線がある。 口縁部内面に少し段がある。比較的深い条線がはしる。 細かい砂粒が多数まじる。		備前
40	"	"	29.0 (8.5) —	黄茶色やや粗い胎土。細かい砂粒が多数まじる。口縁部外面に2 本の浅い凹線がある。口縁部内面に少し段がある。		"
41	SK25		36.7 13.4 — 17.3	赤茶褐色やや粗い胎土。細かい砂粒が多数まじる。口縁部外面に 2本の浅い凹線がある。口縁部内面に少し段がある。比較的深い 条線がはしる。		
42	SK25	甕	— (13.5) — 15.0	外面灰褐色、内面灰色の堅緻な胎土。内面格目のたたき痕が見ら れる。粘土ヒモの跡が内面に見られる。内外面たたき調整。		
43	SK21	皿	8.4 2.2 — 4.4	黄茶色堅緻な胎土。内外共に横ナデ調整。口縁部に少しコグ跡が 内外面共に見られる。細かい砂粒がまじる。		土師小皿
44	"	"	5.0 1.0 — 4.6	淡褐色堅緻な胎土。内外共に横ナデ調整。底部糸切り。		"
45	SK7	"	6.2 1.4 — 4.3	淡褐色堅緻な胎土。内外共に横ナデ調整。底部糸切り。 内外口縁部の一帯にはげしい焼け跡が見られる。		"
46	"	"	16.0 — 4.6	淡褐色堅緻な胎土。細かな砂粒がまじる。底部糸切り。内外共 に横ナデ調整。口縁部の一帯にはげしい焼け跡あり。		"
47	SK21	"	6.7 1.2 — 4.0	"		"
48	"	"	7.2 1.1 — 4.6	茶褐色堅緻な胎土。細かな砂粒がまじる。底部糸切り。内外共 に横ナデ調整。		"
49	SK7	杯	7.6 4.3 — 4.0	灰白色堅緻な胎土。白褐色の釉を内外共に全面施釉。外面呉須 は高台脇内面に2条の横線、外縁部下部に1条の横線があり、 外面口縁部下に主文様を描く。		陶器、染め付
50	"	碗	10.0 (4.3) —	灰白色堅緻な胎土。貫入が内外共に見られる。内外面全面に白 褐色の釉を施釉。外面呉須は、口縁部下面に主文様を描く。		伊万里燒 陶胎染付 18世紀
51	"	"	9.0 5.5 — 3.2	緑褐色堅緻な胎土。内外面共に貫入が見られる。白褐色の釉を内 外面に施釉。外面高台は蛇口目状に削りとっている。外面釉の上に 上給付をほどこしている。削り出し高台。		陶器、上給付
52	SK21	"	11.8 3.7 — 3.8	外面灰白色、内面灰白色で堅緻な胎土。内面を蛇口目状に削って いる。内外面共に釉色の釉を施釉している。体部外縁部は灰 色に発光している。削り出し高台。		白磁
53	SK7	"	— (5.0) — 6.3	茶褐色少々粗い胎土。外面に灰白色の釉を施釉している。外面呉 須はあせた茶色。外面貫入が見られる。内面と高台部は茶褐色に 発光。		染め付
54	"	"	9.2 5.1 — 3.2	茶褐色堅緻な胎土。内外共に白褐色の釉を施釉。内外共に横 ナデ。		尾戸焼

遺物観察表

(第4表)

押出番号	遺構番号	器種	法面 (cm)	口径 底面 側面 底面	特徴	備考
55	SK 7	椎鉢		27.2 11.9 — 11.8	外面部は赤茶色、内面、内外面口縁部は黒赤色やや粗い胎土。細かな砂粒を多く含む。口縁部は外側に2本の浅い凹部がある。口縁部内面に弱い段がある。内面の発締は8本単位である。	備前
56	*	*		34.0 (8.2) — —	黒赤色堅密な胎土。口縁部は外側に弱い段があり、内側に大きく突出する。内面の条線は8本単位である。	*
57	*	こね鉢		— (10.6) 22.4	黒茶色やや粗い胎土。内面格目のたたき痕が見られる。粘土ヒモの跡が内面に見られる。内外面たたき調整。	*
58	SD-2			— (3.0) 10.6	茶褐色やや粗い胎土。底部糸切り。比較的深い条線がはしる。	
59	埴 (埋土)	皿		13.0 3.0 — 8.1	灰白色堅密な胎土。内外面全面に胎明の釉を施釉。外面にボタン唐草文様を描く。	輸入陶磁器
60	SD-2	*		14.5 (2.7) —	緑灰色堅密な胎土。内外面全面に白色の釉を施釉。体面内面に松と雲の文様を描く。内面目口部外側に2つの溝跡。外体にコンニャク般が見られる。奥頭はややあせた藍色。	伊万里
61	*	瓶		10.2 5.2 — 3.0	淡黄灰色堅密な胎土。内外面共に胎色の釉を施釉。	

報告書抄録

ふりがな	いわむら ぐん							
書名	岩村遺跡群							
副書名	岩村地区県営圃場整備事業に伴う岩村遺跡群発掘調査概要							
卷次	1							
シリーズ名	高知県南国市教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	坂本芳史 武市義浩							
編集機関	南国市教育委員会							
所在地	高知県南国市大塚2301番地							
発行年月日	1996 3/31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
岩村遺跡群	南国市 ふくのわ 福船	204	040242	33° 35'	133° 30'	平成7年 9月29日 平成8年 2月7日	2,345	県営圃場 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岩村遺跡群	集落跡	弥生 中世 近世	堀 土坑 柱穴	弥生土器 土師質土器 近世陶磁器				

図 版



調査前全景（南から）



同上（北西から）

P L. 2



S K 7



同上 壁溝セクション



堀 完堀状況

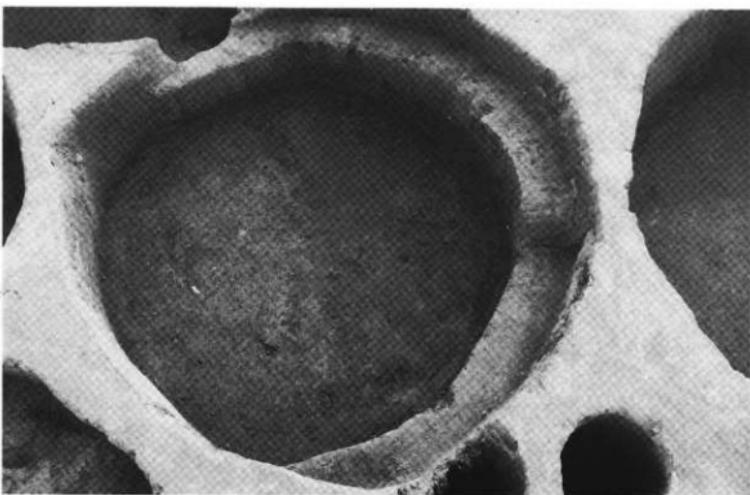


堀 中央バンク南壁

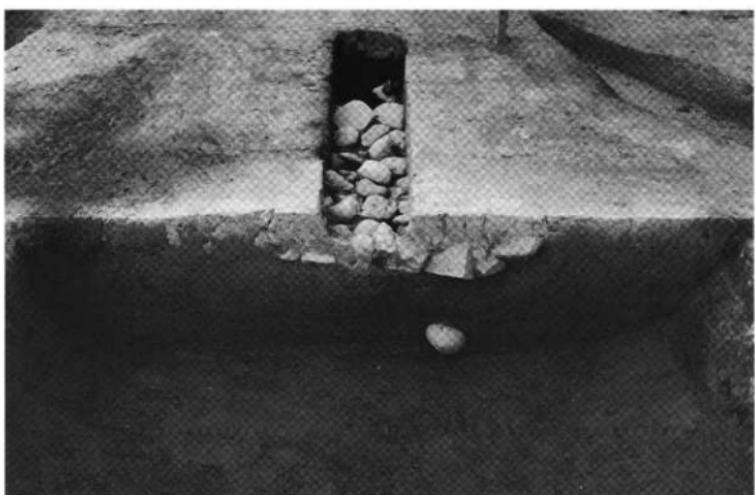
P L. 4



堀 全景（北から）



S K14 完掘状況

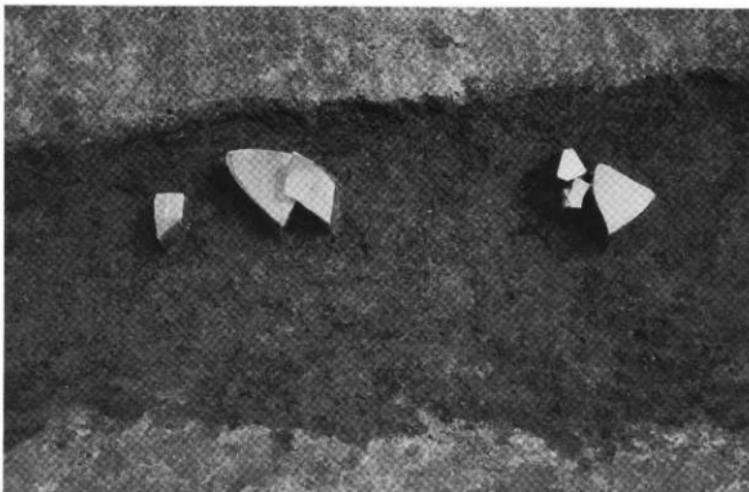


S K25 西壁セクション



S K21 完掘状況

P L. 6



S D 2 - 1 遺物出土状況



S K 7 遺物出土状況



S D14 遗物出土状况



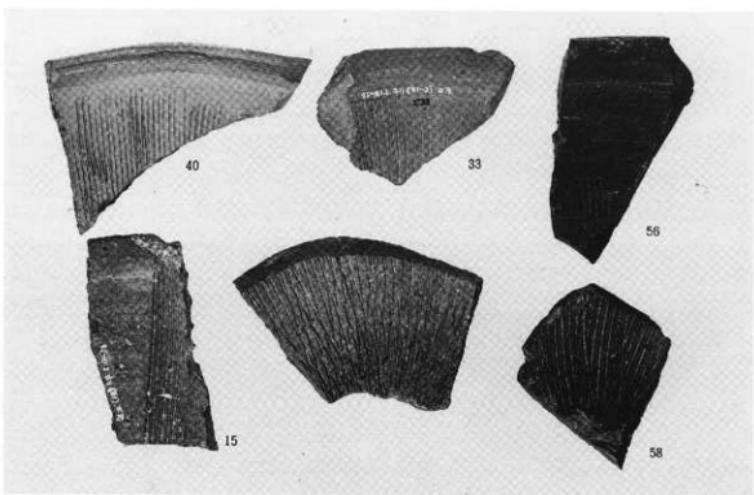
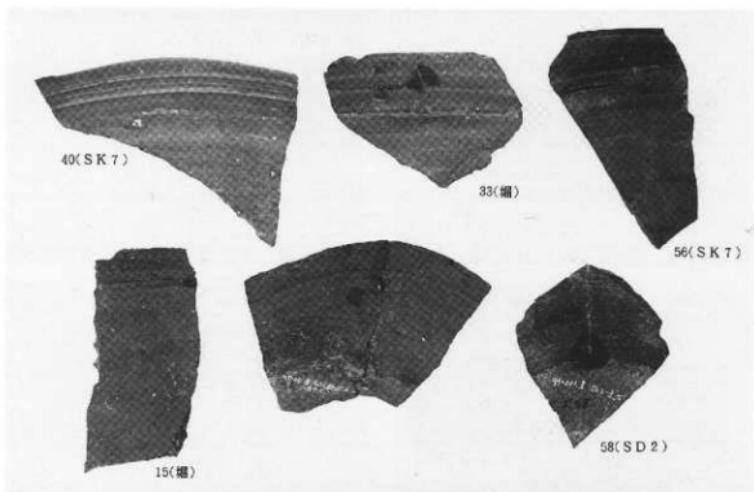
同上 拔大



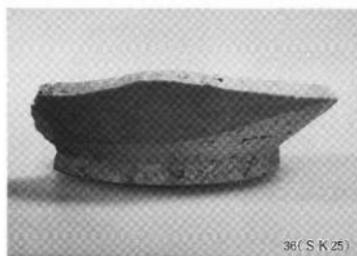
発掘風景



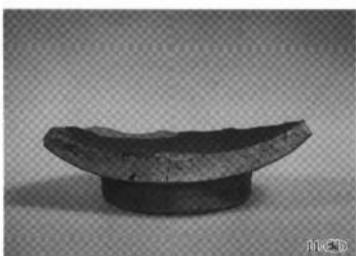
同上



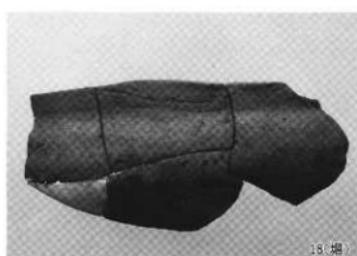
堀 SK 7・SD 2 出土遺物(同上裏面)



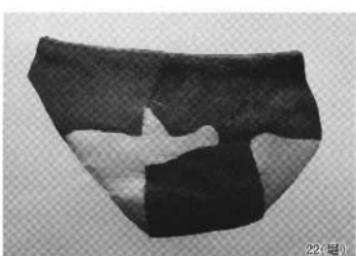
36(SK 25)



116(SD 2)



15(塘)



22(塘)



53(SK 7)



61(SD 2 = 1)

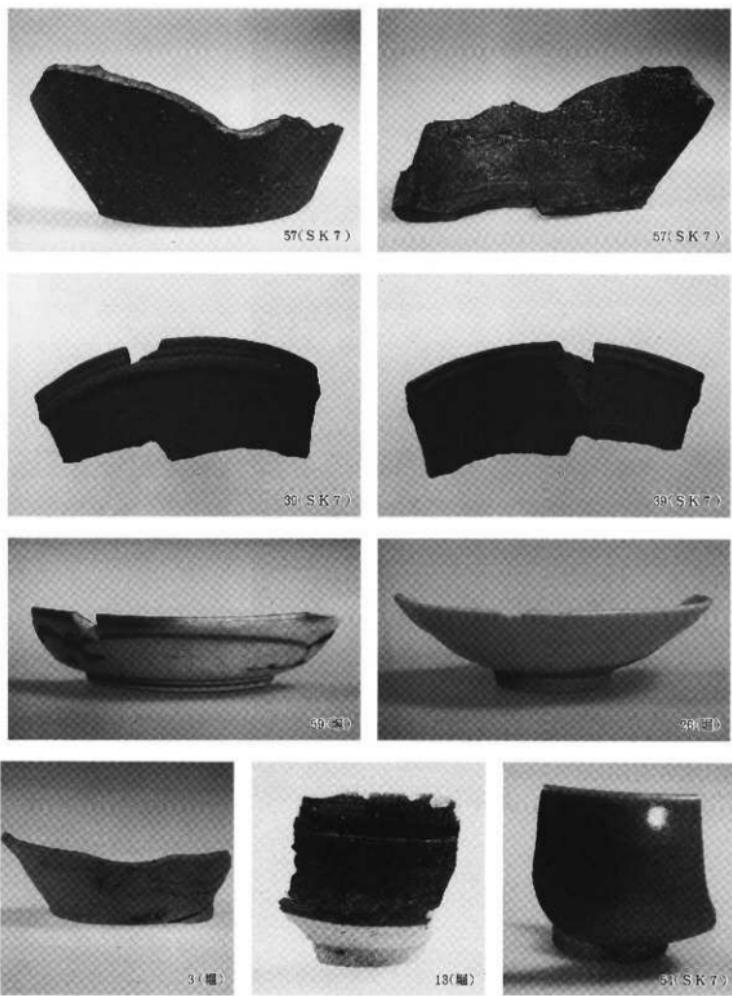


55(SK 7)

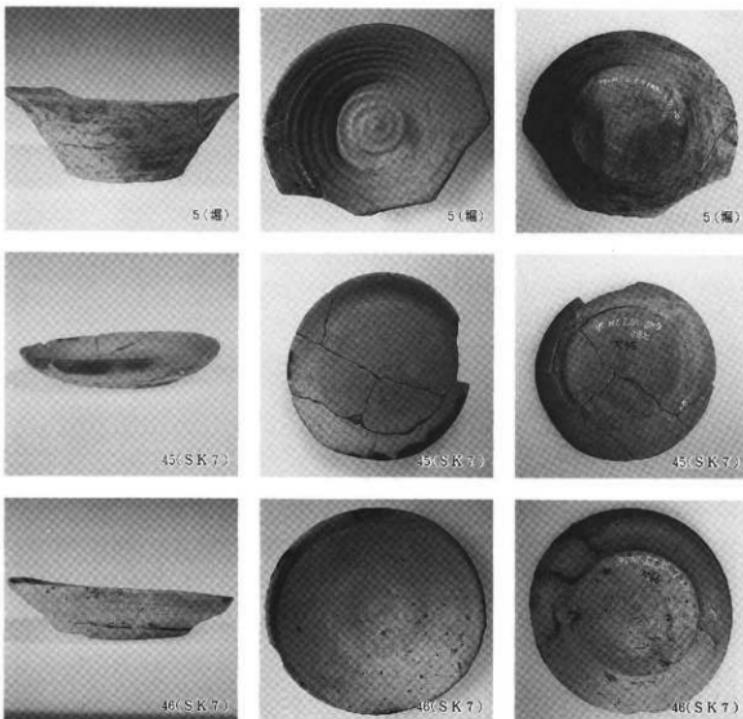


55(SK 7)

堀 SK 7・25 SD 2 出土遺物



堀 SK 7 出土遺物



堢 SK 7 出土遺物

岩村土居城土壘跡(北)

S = 1 : 200



南国市埋蔵文化財報告書 第15集

岩村地区県営圃場整備に伴う
岩村遺跡発掘調査概報

1996・3・31

発行 南国市教育委員会
高知県南国市大塙甲2301
TEL 0888-63-2111
印刷 川北印刷機